恋人に呪われて転生したけど男に抱かれるのは御免だ⑤

ＶＳ勇者・３ラウンド①

赤ん坊のころ、俺は森に捨てられていたらしい。

たまたま茸や薬草の採取をしていた男、父に助けてもらい、そのあとは村ぐるみで育ててもらった。

父も周りも、いい人ばかり。
捨て子ながら、むしろ、生みの親に見放されてよかったと思うほど、恵まれた境遇だったもので。

自分では、そうは思わなかったが、容姿と才能にも恵まれているらし

く、周りは熱狂的にもてはやした。

「こんな、ちっぽけな村にいるのは、もったいない！」

「きっと成長すれば、大業を成すため、旅立つだろう！」

皆がやんややんやするのに、俺はぴんとこなかったし、父のように村でこつこつと堅実に暮らすことを望んだ。

が、世界の情勢は、許してくれず。

女神を監禁して「世界を我が手に！」と魔王が台頭してきたとの噂が。

しばらくもしないで、山奥でひっそりと営む村にも、その影響がでてきたころ。

村長が重い口を開いた。

「大昔にも魔王が世界征服を目論んだことがあった。
今よりもっと、急速に苛烈に。

それを阻んだのが、今、魔王の手によって監禁されている女神さまだ。

女神さまは、これぞという男を選び、神の力が宿った剣を授けた。
はじめの勇者の誕生だ。

勇者は仲間を集め、女神さまに助けてもらいながら、魔王打倒へ。
じゃが、あと一歩のところで、魔界に逃げられてしもうた。

そのあと魔王は引きこもったまま、地上に顔をださず、世に平和が訪

れたのだが・・・。
回復をし態勢を整えたら、また人間界に魔の手を伸ばしてくるだろうと、女神さまは憂慮し、世界の果ての監視をつづけた。

一方、パーティーは解散したとはいえ、勇者が故郷にもどると、授けられた剣を捨てずに、岩に突き刺した。

いつかまた魔王が君臨したとき、剣を抜いた者に、力を継承させるため。
その岩があるのが、この村なのじゃ」

そう説明されながら、つれていかれた洞窟の奥には、たしかに岩に刺さった剣が健在。

錆びずに、研ぎたてのような輝きを保ち、岩のあたりにだけ日の光がそそいで。

まずは村人全員で試そうと、男女かまわず、つぎつぎと剣の柄をにぎった。
が、誰も歯が立たず、諦めかけていたとき、あっけなく引っこぬいたのが俺。

前の人が悪戦苦闘するのを見て、かなり踏んばって力をこめたものだから、後ろにすってころりん。
顔を上げたときには「我らが勇者よ！」「我が村から勇者が！」とお祭り騒ぎ。

それから、村の剣士から訓練を受けたり、冒険の知識を学んだり、巡

る国や地理の勉強をしたり、旅のルートを決めたり、準備に追われて、忙しいままに旅立つまでは、あっという間。

急ごしらえに、勇者として冒険に踏みだすことになったものを「人格も能力も心がまえも文句なし！」と太鼓判を押されて。

正直、心が追いつかなかった。

魔王にお灸をすえたいとも、世界を救いたいとも、人人に希望を与えたいともとくに思わず。

周りが熱烈に望むのを、断れずに応じるといった具合。

消極的な志ながら、期待を裏切らずに勇者をやれたものだから、そのままずるずると。

本当のところ、今も俺の心境は、そのころと、さほど変わっていない。
どれだけ人に「勇者」「勇者」と崇められ、拝まれても、どこか胸を張れずに困ってしまう。
いまだに俺の望みは、父のように村で静かに穏やかに生活をすること。
ただ、今はすこしだけ「魔王を早く、倒したい」と積極的になっている。

今までは「父と暮らしてい故郷にもどりたい」といじいじしていたのが、過去ではなく将来に目を向けるようになったのだ。
その夢を叶えるのには、魔王打倒が欠かせない。

俺の意識を変えた彼との遭遇は、運命的でもロマンチックでもなかっ

た。

初めて目にしたときは荒っぽい連中にリンチされていたし。
助けてやり、事情を聞いたら「あいつら全員の女とヤった」とどうしようもなく自業自得だったし。

町や世情について教えてくれながらも「世間知らず」「田舎者」と馬鹿にしたし。
俺が勇者と知ったら「恩返しについていく！」と態度を豹変させたし。
でも「勇者一行つったら、超モテるもんな！」とすぐにボロをだしたし。

多くの人が「勇者」「勇者」と敬って恐縮するのに比べ、なんとも舐め

た態度。

といって「無礼な」とは思わず、彼といると心安さを覚えた。

勇者をナンパのだしに使うような彼だが、そんな彼だからこそ、俺を人並みに年下扱いし、ときに年上として頼もしく、ふるまったもので。

「勇者さま」「勇者さま」と誰もがすがって頼ってくるのに、彼だけが、手を差し伸べてくれて。

はじめて仲間になってくれ「どうして、あんなヤツが」と陰口を叩かれながら、今もそばにいてくれる、そう彼は、踊り子のキーだ。